

〈政治〉と〈文学〉の間で

——坪内逍遙『内地雑居未来之夢』の中の「外国人」像——

齊藤愛

およそ一三〇年前、長きにわたる鎖国体制を終え、まさに国を「開く」ところから近代日本は始まった。「西洋」の流入とともに、近代国民国家に基礎をおく「人種」と「ナシヨナリテイ」概念もまた誕生したのである。人々の帰属意識は、このときから決定的に変わってしまったのではないだろうか。へかれら（外国人）が目に見える形で現れて来たことで、へわれわれ（日本人）の規定があらたに必要になってきた。

現在ナシヨナリズム概念の問い直しが各分野で活発化している。しかし、近代「日本人」のセルフ・イメージの形成を検討する際に不可欠と思われる、外国人問題の端緒とも言うべき「内地雑居論争」についての研究は、ようやく盛んになり始めたばかりである^{註1}。これまでほとんど意識されることのなかった、身体を持った他者、つまり外国人と共に暮らす——「内地」（国内に）「雑居」（混ざり合って生活する）——その是非を問うことは、近代国民国家としての日本の成立にとつて、避けては通れない道だった。当時あらゆるメディアでこの問題が活発に論議されたのも当然だろう。例えば、一八八六年（明治十九年）五月に、毎日新聞社は「内地雑居」についての懸賞論文

を募集したところ、全国から一二七にのぼる原稿が寄せられた（雑居賛成は一・二篇、反対は一・五篇）。その中の優れたもの数編を本にしてまとめたところ、すぐに再版を重ねたという^{註2}。

明治の言論界において約三十年にわたって繰り広げられたこの論争は、生成期にあつた近代日本文学にも航跡を標しているが、その意味が問われたことはほとんどない。しかし柄谷行人の指摘にあるように、近代のナシヨナリテイの形成に、〈文学〉は中心的な役割を果たしている^{註3}。いわゆる「政治小説」は〈政治〉と〈文学〉の統合を図つたという点で今なお考察すべき問題を含んでいるが、この自由民権という〈政治〉理念をそのまま伝達しようするような、いわば透明な器としての〈文学〉という概念は、坪内逍遙の『小説神髓』（二八八五〜一八八六年）の、〈文学〉の自律性を宣言する理論書によって無効となつた。以降日本の近代文学の主流は〈政治〉と〈文学〉とのひたすらな乖離に向かつていくのだが、その逍遙自身が、「政治小説」とも呼べる実作をいくつか残していることに注目したい。今回取りあげる『内地雑居未来之夢』も、柳田泉によれば「準政治小説」と見なせるものである^{註4}。またこの作品はジュール・ヴェルヌ

等の翻訳から影響を受けて始まった一ジャンル「未来記小説」にくることもできる。文体や形式の面でも、様々な試みがなされたが、結局逍遙は当初の予定の半分ほどで筆を置く。以下、外国人の表象を軸として同時代の言説状況とテキストとの連動の様相を検討し、そこからこの中断の意味を探ってみたい。

一 「内地雑居」論

坪内逍遙作『内地雑居未来之夢』は、一八八六年（明治十九年）四月から十月にかけて、晚青堂が出版、半紙版、和紙十丁前後の小冊子十冊である（註5）。その後冊子体にまとめられて何度か版を重ねている。出版当初全二十冊の予定だったが、中断した。当時数多く出版された「内地雑居もの」（註6）の中でも、最も有名なものである。

一八八六年といえ、前年に刊行しはじめた理論書『小説神髓』の実作例として、逍遙自身が立て続けに小説を発表していた時期である（註7）。執筆の動機は、「その頃、内地雑居ということが世論の題目だったので、友人に勧められて慢然と筆を執っただけのもので、たいした抱負も何も無かった」（註8）ということだが、柳田泉は「事實は、そう慢然としたものではなく、相当調べて書いたものであることは、内容の証する如くである」（註9）と言う。確かに、「内地雑居論争」の大勢と主要な論点が的確に押さえられており、プロットに生かされていることは疑いがない。

煩瑣になるがそのあらすじを紹介しておこう。

主人公は三人で、小説家の菱野詞狂と、洋行帰りの代言人で

政治家志望の田所鼎、実業家になる渥美恭輔である。菱野と田所は上野行きの汽車に偶然乗り合わせ、七年ぶりの再会を果たす。彼らがかつての同級生だが、話題は共通の友人渥美恭輔の身の上に及ぶ。渥美は愛知県半田の酒造家の跡取りだったが、家庭内の事情でいったん学業を中絶して家業に従事したものの、父と意見が合わず家を出て、田所のオックスフォード大学留学に同行を願ったが断われ消息を絶つ。ところが、二人が上野に下車した後、偶然入ったコーヒー店の女主人が渥美にゆかりのある稲積みやという女性で、渥美のその後が判明する。渥美は田所に断われた後、大阪堂島の米商稲積庄次郎の跡取り息子である玄次郎がフランスへ渡るのを頼りに同じ船に密航する。様々な苦勞の末、渥美はフランス人商人シユラーの信用を得て、日本に設立した生糸製造所の一番番頭となつて、今は高崎の製造所をまかされている。つい何カ月前に、シユラーの代理として再び渡欧したということであつた。一方玄次郎の妹であるみやを、稲積家の破産と没落、さらに父と兄の相次ぐ死という悲惨な運命が襲つた。しかし、亡兄に対する恩義で、渥美がみやや母娘にコーヒー店を開く資金を提供したのである。が、その渥美の不在中、二番番頭の千本という男とシユラーの妾お塚（二人は密通している）との間で、彼を陥れる計画が進められていくらしい。一方渥美はちょうど日本に向かつていたが、長い船旅の間に同船者のアメリカ人宣教師の娘ルシイ・ホウトンと気持ち近づきかけている。しかし彼らの乗った船はインド洋上で暴風雨に遭遇し難破、乗客達は夜の嵐の海に投げ出されてしまう。一方、日本で千本のたくらみを探っていた菱野

は難破の知らせを聞き、みや母娘に知らせようと急ぐ。その途上で彼は、市内で中国人と日本人の暴動事件があり、死傷者が多数出たというニュースを聞く。

作品はここで終わってしまっている。おそらく構想の半分にも達してないうちに中断したため、空中に放り出された恰好のエピソードが散在し、読みにくい作品となっている。

さて、それではこの作品の背骨にあたる「内地雑居論」とはどのようなものだったのだろうか。稲生典太郎は、「ここに「内地雑居論」というのは、幕末より明治中葉——概ね明治三十二年の所謂新条約実施に至る間に、かの「条約改正論」と表裏一体をなして論ぜられた、当時の民間外交世論の代表的なものの一つの謂いである」と定義している。さらに、「即ち内地雑居論とは、原住民たる日本人の居住する日本国内へ、外国人が渡来混住することをめぐっての、可否、期待と憂慮、利害と得失、より身近かに言えば、外国人が好きか嫌いかという心緒についての論議である」とその「土俗的な本音の民族感情論」の側面を指摘している。^(注10)

また、山脇啓造は、「条約改正で対等条約を実現する結果として、条約国人に内地を解放する問題は、一八七九年に就任した井上馨外務卿による条約改正交渉の進展にもなっており、八〇年代以降国民全体を巻き込んだ大論争となった。当初雑居賛成論が優勢だったが、八〇年代後半の国粹主義的機運の中、反対論が台頭し、明治憲法下の初期議會で激しい論争となった。内地雑居を「大日本帝国開闢以来、未曾有の大問題にして、斯の機は則、皇国の浮沈存亡に関する空前絶後の大時期」と考える者

が少なくなかったという」とその論調の推移をまとめている^(注11)。結局、一八九九年（明治三十二年）に税権の回復に伴い居留地制度は撤廃され、「内地雑居」問題は一応の解決をみる。

ここで詳述する余裕はないのだが、論争は大きく攘夷の流れをくむ時期尚早派と、新時代の開明を目指す賛成派の二つの流れに分かれていた。しかしその対立の図式がかならずしもはっきりしていたわけではなく、たとえば横山源之助のように、下層社会の職環境保護という視点から反対の立場をとった者もいた。福沢諭吉は当初尚早論を唱えたが、後賛成派に転じている。

また、「日本民族」をどうとらえるかで論の展開の方向も変わってきた。この論争の背景には当時の学界を席巻したスペインの社会進化論およびダーウィンの生物進化論がある。スペインは自身この「内地雑居」に関して忠告を求められ、列強に帝国主義的侵略の口実をつくるきっかけとなる恐れがあるので、避けるべきであると答えている。その根拠となるのは彼の人種観であり、優等人種である欧米人に劣等人種である日本人は圧倒倒されてしまうからというのである^(注12)。内地雑居時期尚早派陣営の雄、官学アカデミズムのエリート井上哲次郎は、スペインとダーウィンの理論を引証しながら、雑居反対の立場をとる自説を展開していく。劣等人種である日本人の独立を守るには、優等人種の混入を避け、自国の領土内のみで富国強兵にはげむべきであるというのである。一方内地雑居賛成派の陣営では、たとえば田口卯吉は古来日本人は大陸からの渡来人たちと混血をくりかえしてきた民族なのだから、なるべく多くの血を入れて日本人を増やし、海外雄飛すべきだと説いている^(注13)。

この論争では、大きく言つて次のような問題点を指摘することができるだろう。第一に、土地の問題。外国人に不動産所有を許すのかどうか。第二に、身体の所在の問題。外国人に日本国内を自由に旅行させてよいものかどうか。第三に、経済の問題。外国人に制限なしで商業活動をさせてもかまわないのか。

第四に、血の問題。外国人と日本人の婚姻はどう処理するのか。第五に、問題発生時の処理の問題。外国人が犯罪をおかした場合、どの国の法律を適用するのか。この問題群を見てすぐに気が付くのは、ナシヨナリズムの血、土、所有と権利などの問題と根を一つにするものが非常に多いという点である。ナシヨナリズムとレイシズムは表裏一体の概念であり、同一性を求める力は必然的に異質なものを排除していく方向をとるだろう^{注14}。

『内地雑居未来之夢』が世に問われた一八八六年（明治十九年）という年は「内地雑居論」が大きく転換する時期にあつてゐた。稲生典太郎による論争の概要では、井上馨が外務卿に就任した一八七九年（明治十二年）九月十日に始まり、一八八七年（明治二十年）九月十七日の井上の外務大臣辞職までの約八年間は、いわゆる「鹿鳴館時代」にあたり、条約改正事業と一方で欧化政策が進められた時期で、論調は改正後の「内地雑居」を歓迎するものが大勢だつたという。しかし一八八六年（明治十九年）に長崎事件、ノルマントン号事件などが起こるにつれ、世論も変わってくる。

明治十九年八月十三日には長崎において、多数の清国北洋艦隊の水兵の日本人警官に対する暴行事件が勃発し、同

年十月二十四日の英国船ノルマントン号の沈没による日本人乗客二十数名の溺死事件、所謂ノルマントン号事件も明るみに出て、国民感情は逆撫でされるばかりで、甘い内地雑居許容論などは一気に吹きとばされる勢いとなつた。内地雑居論が色あせたと見る間に、どうして漏洩したのか、井上条約改正案の一部分が民間有志の手に入り、これが秘密出版物の形で何種類もアングラ的に出廻り、特に井上案の裁判管轄問題から派生する外国人法官の我國の各級裁判所への雇傭問題が俄然論議の焦点となり、昨日まで内地雑居を期待乃至謳歌してゐた民間の論客や物書きたちは、一斉に口を閉じてしまう。^{注15}

『内地雑居未来之夢』の稿が起こされたのは、一八八五年（明治十八年）九月だといふ^{注16}。「未来記」としての作品世界の前提を設定した「緒言」から、その「政治」的立場が窺える。

- ・ 税権の回復。
- ・ 軽罪、違警罪は日本の裁判所で、重罪はその国の裁判所で裁く。
- ・ 雑居地を三府七港（従来の五港に下関、敦賀を足す）に区域を決めて設ける。
- ・ 雑居地外の旅行、通商は許可、ただし通商券が必要。
- ・ 雑居地外では、不動産所有および居留も不許可、ただし雑居地内においては財産も持てて永住もできる。
- ・ 公債は十中八九は売買できるが、財産を所有するには日本

の法律による。(以上、引用者がまとめたもの)

しかし逍遙はこの後の「附言」で、「萬般の筋すべて作者の空中樓臺なり。政府のおぼしめしを推測したるにもあらず。作者の願望をうつしたるにもあらず。」とあらかじめ予防線を張っている。これを逍遙がわれ知らず改進黨の宣伝をしているとする。これに對し、和田繁次郎は、当時の条約改正交渉の政府案と、逍遙の身近な勢力であった改進黨のブレイン小野梓の条約改正に関する見解を折衷させ、なおかつ逍遙自身の論を加えたものであるとしている(注18)。

しかし、この作品はそういった「政治」的言説に完全に回収されてしまうものではない。従来の「政治小説」とこの作品を分かつものは、〈文学〉の自律性をあくまでも追求しようとする逍遙の一貫した姿勢だろう。その固執が作品設定との内的矛盾を徐々に大きくしていき、ついには中絶という事態を招いたのだといつても過言ではないのである。「寓意小説」と自ら銘打つたこの作品が、作品外の言説といかなる関係を構成しているのだろうか。ここでは、「外国人」という「他者」の表象を通して、具体的に見ていこうと思う。

二 「支那人」の形象

まず目に付くのは、「支那人」(現在は「中国人」と呼ぶのが適当であるが、ここでは作品表記に従つてこの呼称を使う)の劣悪なイメージだろう。作中いたるところに「チャンチャン」等の差別語が頻出し、個人レベルでは潜在的犯罪者とされ、集団レベルでは日本人の職場を奪うものとして、憎悪と軽蔑の対

象とされている。

潜在的犯罪者としての「支那人」は、あらかじめ悪のイメージを付与されて登場してくる。例えば、初版の稲野年恆による口絵には、「玩淡平」(読みは不明)と名付けられた弁髪で支那服を着た男が、首根っこを押さえつけられているところが見られる(図一参照)。この人物は、結局本文においては一度も登場しないのだが、日本人に比べて格段に醜く描かれているのがわかる。ちなみに、この口絵は主要人物がどのような関係を構成しているかを、構図によつて物語っているらしい。四人の人物が激しくぶつかりあい、その鬭争を中央で身を低くして筆を持ちながら傍観しているのが小説家の「菱野詞狂」である。四人のうち、「ジャック・シューラ」は左の「阿つか」の胸ぐらをつかみ、さらに足を大きく蹴り上げて右の「田所鼎」にも暴力をふるっている。政治家志望の「田所鼎」は商人「ジャック・シューラ」の攻撃を防ぎながら、むしろ「玩淡平」を組み伏せようとしているようだ。ここから、強大な西洋の力への恐怖、中国の脅威とそれに対する反感、その両方を防ぎかねている日本という意味を見いだすのはたやすい。弱く虐げられるものを女性の「阿つか」に、戦うものを男性の「田所鼎」に表象させているのは、伝統的ジェンダー概念をそのまま踏襲していると言えよう。なお、渥美恭輔(「渥美氏恭輔」)はルシイ・ホウトン(「保頓氏瑠紫」)と共に、その前のページに独立して描かれており、花がちりばめられた描かれ方から、二人の恋愛が物語の柱になるはずだったことも窺える(図二参照)。

おそらく逍遙の当初の腹案では、「玩淡平」は主要な人物、そ

れも悪役として活躍するべき人物として考えられていたのだろう。本文中で、汽車に桶川から乗ってきた「支那人」は、「年齢二十二三、眼鏡く色白く、鼻筋通りたる支那人也。身粧も何処となう卑しげなれば、上等室は其分にあらずや。油断なりがたし」(五八四頁。以下本文引用の後の数字は、『逍遙選集 別冊第一』のページ数を示す)と描写されている。しかしこの人物はその後作品の中で、一度も登場しない。これも結局登場しなかった「玩淡平」と関連する重要な人物であったと思われる。この汽車の中の怪しい(とあらかじめ微づけられた)支那人のことが頭にあつたため、上野で人がぶつかつてきたときに、菱野詞狂はすかさず「エイ支那奴め」と叫んだのである。

「支那人」に対する脅威と軽蔑の念は、当時民間では広く共有されていた(註)。清国は大国ではあるが近代化の面では日本に遅れをとっているという認識は、岩倉具視使節団の『米欧回覧実記』(一八七八年)にはすでに見え、一八七四年(明治七年)の台湾出兵に際し清国がとつた宥和的な態度が、実際には日清対等に弱体であつた軍事力を日本が優越するものとの根拠を与えた。その後、朝鮮の領有権と利権をめぐる、清国と日本とはにらみ合いをくり返した。一八八〇年代には、八二年(明治十五年)の壬午事変、八四年(明治十七年)の甲申事変を経て、清国は軍事力においては日本のライバルとなったが、近代化の面では勝っているという認識が見られるようになる。しかし、一八八五年(明治十八年)には定遠・鎮遠という当時最大級の軍艦が清国に配備され、日清間の海軍力におけるバランスは圧

倒的に清国に有利な状況になり、日本側の危機意識が強まる。ここから日本は清国を「近代化した強国として評価するようになり、それが清国の産業や中国人労働者の勤勉さに対する評価や恐れにもつながっている」(註)となつた。日清戦争に勝つた時点から中国人蔑視が始まつたわけではないのである。こういった政府及び民間の対清国認識が、作品内ではほぼ何の批判もなく再生産されている。しかしその視線が一瞬揺らぐところがある。

最終章では、「支那人」と「日本人」が人力車で「英人」の客の取り合いをしたあげく、ついに日頃の双方の敵対心と不満が爆発して、多数の死傷者が出るほどの暴動に発展してしまふ。

元来支那人の勞力者流は最も狡獪にて貪欲なるゆゑ、(中略)総ての力役に争うて従事し、只管其利得を専占せんと試み、日本の勞力者を圧倒せんとするにぞ、已に一二年以前の前より、日本の力役者は支那人を敵視し、之を惡むこと甚しけれど、さりとて奮勵して弊習を删除し、みづから改良して市場に立ちいで、自然の勝敗を決せむとは思はず、動もすれば腕力に訴へ、之を凌辱して怨を遣らむ、と最も淺墓なる思想を抱きて、常に其機会を俟居たるに、支那人もまた彼等を憎みて、倭奴不敬なり、といふ氣込にて、おなじく輕蔑する心あるゆゑ、しばしば豚の尾と譏謗され、若くはチャン／＼と罵らるゝを聞いて、之を憤ること大方ならず。(『選集』七一―七一九頁)

作品全体を見れば「支那人」は蔑視と恐怖の対象としてのみ

描写され、へわれわれのまなざしを受ける一方の〈他者〉にとどまっている。しかし、この箇所では、蔑視・差別される側の「支那人」の怒りが叙述され、一瞬へかれらの側からの視点が表示される。〈他者〉たちが蜂起し始めた場面でのこの作品が中断されることとなったのは、偶然ではない。

この部分を除いて、作中いたるところに見られるのは、狡猾でなりふり構わず働き、道徳や生活の規範が低いといった支那人像である。これは出稼ぎの外国人に抱く現在の日本人のイメージとよく似ている。民間のみならず、政治家の会話の中に次のような偏見に満ちた表現も挿入されている。

「響山という相撲取りについて：引用者注）兎角陰險な手を用ひてな。まるで支那人の商法のやうでな。：（中略）
…実に困るテ、支那人の弊習は。…第一徳義上に影響するから。…職工社会なぞは此六七年以来、ズツと徳義の標準が下がったやうぢや。」「イヤ実に甚しい事です、早晩放逐論を…米国の二の舞を是非やらなければア不可すまいヨ。内、徳義を残り、外、経済を害しますから。」「イヤどうも支那人は五月蠅奴ぢや。まるで夏の夜の「のみ」と蚊ぢや。内と外から攻めよつて、ぼんやりと眠むツちよる日本の膏血を喰ひをるから、ハッハ。」（『選集』六七—六七二頁）

「米国の二の舞」というのは、一八八二年にアメリカで施行された中国人労働者排斥法を指していると思われる。一八四〇

年代から中国人の海外移住は本格化するが、これには一八三三年にイギリスに始まった奴隷制廃止による低賃金労働者の需要の増加があつた。中国政府は労働者を「華工」としてその海外移住を正式に認めるが、受け入れ側の各国では、一八五五年にオーストラリアで、七五年にハワイで、八一年にニューギニアで、八二年に米国で、八六年にカナダで中国人労働者排斥法が施行された。その結果、七〇年代以降、中国人労働者受け入れの中心は、新大陸から東南アジアへと移ったという。こういった各国の対応は、日本での中国人観にも大きく影響した^{注21)}。増え続ける労働力としてのへかれらは、個々の顔がはつきりしないがためにより恐怖を増幅させる。一八七五年（明治八年）に三菱商会によつて横浜・上海航路が開設され、以後三江地方（揚子江流域の江蘇、江西、安徽のこと）からの多数の中国人が来日し、中国人口が急増する。内閣統計局による『日本帝國統計年鑑』によると、「内地雑居未来之夢」が書かれた一八八五年（明治十八年十二月三十一日付）には、在日外国人の総数六八〇七人の内、中国人は四〇七一人を占めている。^{注22)}しかし、欧米人には七四年（明治七年）に認められていた国内旅行が、中国人には八六年まで禁止されていたなど、差別待遇が存在していたのである。^{注23)}

また、一八八五年（明治十八年）を境に、清国の軍事力の優越を意識し列強と共に日本を抑え込みにかかってくるのではないかと意識し始めていた矢先の、一八八六年八月に長崎に入港した軍艦の将兵が、飲酒のうえ日本の警官・民間人と乱闘し、双方に死傷者を出したいわゆる長崎事件は、民間レベルでの中

国人への脅威のイメージを増幅させたのではないだろうか。なおこの日清両国の労働者による暴動場面を含む『内地雑居未来之夢』の最終冊は事件の約二ヶ月後にあたる同年十月に発行されている。

さらに注目したいのは、へかれらへの姿を描写していく過程で、必然的に「われわれ」の像が形成されていく過程である。

たとえば、第十章ではある政治家の演説の傍聴記という形でこの問題がとりあげられている。「日本人」労働者が「支那人」に圧迫されている理由が、箇条書きにして列挙されているが、以下それを見てみよう。

(第一) 忍耐に乏しくして、些少の凌辱を忍び得ざるが故なり。

(第二) 日本人民たるの資格と、雇人たるの資格とを弁別する能はず。生中に見識ぶりて、往々外人を賤蔑するが故なり。

(第三) 生意気と小才覚に失して、雇主の命令を厳守せざるが故なり。

(第四) 時間の約束を始めとして、万事に綿密を欠くが故なり。

(第五) 利を得るに綿密ならざる故なり。例へば一銭、二銭を争ふべき境遇にありて、尚且五厘を軽蔑なし、二銭賜はらば応命せん。一銭五厘ならば辞絶せんなどと、つまらぬ場合に士族肌を現はし、竟にアブも蜂も失ふが故なり。

(第六) 遠慮先見に乏しくして、手より直ちに口に運び、毫も貯蓄といふ事をなさざるが故なり。

(第七) 箇々介立して微利是争ひ、一致団結して支那人と競はざるが故なり云々。(『選集』六五六―六五七頁)

ここでは、今まで競争原理にさらされていなかっただが故か、プライドが高く、そのわりには勤勉さや堅実さに欠け、自分の置かれている位置が把握できていないために団結しようとする意志もない、「日本人」の労働者の姿が浮かんでくる。この姿に對置される「支那人」は商才に長け、かつ勤勉さがあり、仲間同士の結託意識が強い。ここに、他者像の形成にともなう自己像の生起を見ることができよう。

なお、「朝鮮人」に対する言及が全くなされていない問題や、イギリス人・フランス人等の白人に対する視線の差異など、ナシヨナリズムの言説と関連させて考察すべき点は多々あるが、枚数の関係で別稿にゆずりたい。

三 中断の意味

すでに触れたことだが、『内地雑居未来之夢』は結局半ばで中断してしまった。当時の文学界に絶大な影響を持った逍遙の発表する作品は、一作ごとに注目を浴びていた。だから、この構想の大きな作品の中断を惜しむ者も多かったらしく、代表的なものでは一八八六年(明治十九年)十二月二十五日付の『読売新聞』紙上で、漣山人(巖谷小波)が「敢て春の舎の御主人に叩く」と題して中断の真意を問うている。逍遙はこれに応えて、

翌年の四月二日付の同新聞紙上で次のように語っている。

第一、未来の夢は拙作中の拙作なりと信ずる故に、我国の小説壇を汚す者なりと自信したる事

第二、三千七百万人中の一人位は或ひは拙作を拙作なりと認むるの眼なくして、之を真似たまふ人あるやもしれず。現に、書生かたぎ妹背鏡の如き拙作を真似して綴られたる原稿を見たる事あり。斯くては我国の小説の前途に、如何なる大弊を醸すやもしれずと心配いたしたる事

第三、真の小説は現在若くは過去を寫すに止まるべし。将来の事を小説に綴るは決して稗史家の真面目に非ず（此理は近日雜譚欄内にて御意得ませう）、と斯様に豁然と悟りたるに因り、窃かに後悔を感じたる事

第四、ア、可厭と感じたる事（此原因は色々あり先日一寸申した積り）

第五、ナント旨からうと自惚れて書いても、大概にマズイが文章の常なり。ましてや可厭と思つては無要なりと存じたる事

（句読点や旧漢字など適宜引用者が改訂）

この中で注目すべきは、第二の理由に見えかくれする、先駆者としての自負と、第三の理由にあげられている、「未来記」という形態に対する危機感であろう。

逍遙はこの二ヶ月後に同紙上で「未来記に類する小説」とし

て、「未来記」小説論を展開している²⁵。この論の中で逍遙は自分の論の基礎を「美術は（逍遙は「芸術一般」とほぼ同じ意味で使っている…引用者注）感情を以て真理を感得す」という認識においており、理性による認識を「哲学」であるとして小説を含む「美術」と分けている。そのために、「未来記」は「理屈を画を以て示し」ているに過ぎず、「直接観察を根本として真の妙想を寫すといふ美術に違背する」というのである。「観察」に理念が先立つような小説のあり方に、強い危機感を持つていたことが窺えるところである。

しかし、この作品は当初から「本書はもと純粹の小説とは異なり、小説といはむよりは、寧ろ寓意小説ともいふべき者なり」と断わりを入れて開始されたはずのものであった。しかも『小説神髓』では「寓意小説」にスペンサーの『フェアリー・クイーン』（Edmund Spenser, *The Faerie Queene*, 1590-96）やバニヤンの『天路歷程』（John Bunyan, *Pilgrim's Progress*, 1678, 1684）の例を挙げ、「單純なる寓言の書（フハイブル）の次第に進化し変遷して発達したる物」と評価を与えているのである。さらに、『八犬伝』をそこに位置づけた「勸懲小説」とは區別し、「寓意小説は勸懲をもて主眼となし、物語をもて方便とせり。しかるに、勸懲小説は物語をもて本尊とし、勸懲をもて粧飾とせり」と述べている。逍遙もこの時期の知識人の例にもれず、スペンサー流の社会進化論の影響からか、「未開蒙昧の世」から「開明の世」に「人情」も「進化」するという立場をとっている。それにもなつて小説も「奇異譚」から「ローマンス」へ、さらに「真の小説稗史（ノベル）」へと、また「フハイブル」か

ら「寓意小説」へと発達進化していくと述べられている。逍遙は「小説神髓」の時点では社会風刺の手段としての「寓意小説」に価値を見出しているのだ。執筆時の民間世論の最大の話題「内地雑居論」を取り込もうとした『内地雑居未来之夢』は、「寓意小説」としての「未来記」というスタイルを、彼が牽引している日本近代文学界に確立しようとする試みだったのではないだろうか。

「未来記」は政治小説では比較的良好に用いられたスタイルで、政治的主張と現政権批判のために舞台を未来に移して一つの社会モデルを提示しようとしたものである。理念が先行するのは必然と言えよう。これは、十年後（一八九〇年、明治二十三年）という時間を切って政府が国会開設を約束した一八八一年（明治十四年）の事実が大きく負っていると思われる。ここに、未来の約束に向かって進む現在という時間認識が生まれ、「未来記」小説を数多く誕生させたのである。逍遙が「未来を書く」という行為の持つ陥穽に遅まきながら気付いた時には、小説は半ばまで進んでいた。しかも、単なるアレゴリーであったはずの人物たちは、あまりにも多くを自律的に語りすぎている（「小説家」たる菱野詞狂の内的独白の多さを見よ）。

さらに、逍遙自身も気づいていなかったが、「外国人」という〈他者〉をどう描くかというもう一つの陥穽もこの作品を抱えて込んでいた。「支那人」の表象で見られた通り、同時代の言説をこの作品は忠実に再生している。おそらく当時、「外国人」をどう扱うのが正当なのか、逍遙のみならず作品外の世論においても結論が出ていなかった。しかしいまや作品内の〈他者〉た

ちは自分の言葉を持ち始めつつある。暴動の場面で中断されたのは、〈他者〉消滅後の世界を描ききる用意が逍遙の側に無かったからと言えよう。

逍遙が〈近代文学〉の形を考察しはじめた時期は、江戸期からの戯作と、「翻訳小説」を含めた「政治小説」の全盛期であった。男女関係のみを自動化した記述でくりかえす器からも、〈政治〉という理念をただ盛るためだけの器からも、逍遙は可能なかぎり遠ざかろうとし、「開明進化」した新生国家の国民にふさわしい、発達した「人情」を写し取る〈文学〉の成立を目指していた。しかし、「寓意小説」という形で〈政治〉を〈文学〉と融合しようとした試みにおいて、未だ熟していなかった時間認識と〈他者〉認識が躓きの石となったのである。

(注)

- 1 『内地雑居論』の主要な論文を集めたものに、稻生典太郎編の「内地雑居論資料集成」（明治百年史叢書、原書房、一九九二年）全六巻が出ている。小熊英二の『単一民族神話の起源』（柏書房、一九九四年）でも、日本民族の概念が形成されていく初期の基礎をこの「内地雑居論」においている。また、近年の外国人定住労働者の増加に伴い、外国人との共生との視点から、社会学の方面的研究も増えている。梶田孝道編『国際社会学——国家を超える現象をどうとらえるか』（名古屋大学出版会、一九九五年）や伊豫谷登士翁・杉原達編『講座外国人定住問題 第一巻 日本社会と移民』（明石書店、一九九六年）など。
- 2 稻生典太郎「解説1『内地雑居論の消長とその資料』（内地雑居論資料集成1）明治百年史叢書、原書房、一九九二年）八頁。
- 3 柄谷行人「ナショナリズムとしての文学」（『文学界』四十五号、一九九一年一月）。後に『戦前』の思考（一九九四年、文芸春秋社）に改稿、所収。もちろんこの認識はB・アンダーソンをふまえた上のものである。

- 4 柳田泉『明治文学研究 第9巻 政治小説研究 中巻』(春秋社、一九六八年)四五頁。
- 5 『逍遙選集 別冊第一』(逍遙協会編、第一書房、一九七七年)所収。本文引用部分の後の数字はこの『選集』のページ数を記したものである。
- 6 「内地雑居もの」は「未来記」というスタイルと結びついているものと思われる。現在手にするのは困難なものが多いが、主要作品を記しておく。菊池信太郎「時勢走馬燈」(一八八七年(明治二十年)三月、吸霞仙史「内地雑居街噂」(明治二十年五月)、牛山良介「社会小説日本之未来」(一八八七年(明治二十年)五月)、夢遊居士「内地雑居東京未来繁盛記」(明治二十年三月)、松永道一「内地雑居経済未来記」(一八八七年(明治二十年)五月)など。
- 7 『當世書生氣質』(一八八五、六年)、『妹と背かゞみ』(一八八五、六年)、『京わらんべ』(一八八六)など。
- 8 神代種亮稿・坪内逍遙補「内地雑居未来の夢解題」(『内地雑居未来之夢』福永書店、一九二六年(大正十五年))に、「(作者直話)」として記載されている。
- 9 柳田泉、前掲書、四十五頁。
- 10 稻生典太郎、前掲書、三頁。
- 11 山脇啓造「もう一つの開国、明治日本と外国人」(伊豫谷登士翁・杉原達編『講座外国人定住問題 第一巻 日本社会と移民』、明石書店、一九九六年)六十五頁。
- 12 鶴浦裕「進化論と内地雑居論—進化論受容の側面」(『北里大学教養部紀要』二十二号、一九八八年)。
- 13 小熊英二、前掲書、三三—四八頁。
- 14 笠間千浪「ナショナリズムとレイシズムの交錯」(『ネーション』ステイト)イギリスの歴史と現実」(梶田孝道編『国際社会学』注1参照)に、「ナショナリズムとレイシズムの接合、あるいは機能的類似は、両者とも(他者)との関係でつくりだされる自己と他者のカテゴリーを使用することから生じる。ネーションや「人種」というカテゴリーは、自己(われわれ)を規定するとともに、同時に他者(かれら)を規定する。つまり、一つのカテゴリーは包摂と排除の両方の基準となる。」という認識が

示され、イギリスの例が論じられているが、本論もこの理解を共有するものである。

- 15 稻生典太郎、前掲書、十頁。
- 16 和田繁二郎「近代文学創世期の研究—リアリズムの生成—」(桜楓社、一九七三年)四六五頁。
- 17 柳田泉、前掲書、四六頁。
- 18 和田繁二郎、前掲書、四六六頁。
- 19 岡義武「条約改正論議に現われた当時の対外意識(二・完)」(『国家学会雑誌』第六十七巻、一九五三年)
- 20 伊藤之雄「日清戦前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」(古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』緑陰書房、一九九六年所収)一五八頁。
- 21 山脇啓造、前掲論文、六九—七〇頁。
- 22 内閣統計局編『日本帝國統計年鑑 復刻版 第6回』(東京リプリント出版社、一九六三年)六一—六三頁。
- 23 山脇啓造、前掲論文、五九頁。
- 24 春のや主人「貴重なる新聞紙を借用して」『読売新聞』一八八七年四月二日。
- 25 逍遙遊人「未来記に類せる小説(第一)」『読売新聞』一八八七年六月十四日、「未来記に類せる小説(第二)」『読売新聞』一八八七年六月十五日。
- (さいとう あい 筑波大学大学院 博士課程
文芸・言語研究科 比較文学)



※図版は『内地雑居未来之夢』（福永書店、一九二六年（大正十五年）より。これは、初版にあたる分冊の第一冊目に口絵として掲載されたものを冊子体にまとめる際再収録したもの。三康図書館所蔵。